

居住環境が健康・スポーツ意識に及ぼす影響について

I. はじめに	舛本直文*
II. 結果と考察	酒井誠*
1. 生活意識の構造	山崎秀夫*
2. 都市における健康行動の要因パターン	佐久間春夫**
3. 運動・スポーツ生活について	中村誠***
III. まとめ	

要 約

居住環境形態が住民の生活意識や健康・体力意識、および運動・スポーツ意識に影響を及ぼすという前提から、都市地区居住者の健康・体力・スポーツ生活改善に資する基礎的資料を得ることを目的としている。

調査方法は、A)生活意識 B)健康・体力意識 C)運動・スポーツ意識の三部門から構成される質問紙法を用いた。調査対象者は、都市地区として都内赤羽地区、非都市地区として、準農村地域である千葉一静岡地区、中間形態として神奈川の津久井湖周辺地区の居住者である。

得られた結果の主な概要は次の通りである。

- ① 中間形態地区において趣味やスポーツに充実感を感じず人が多いという地域性が窺える。
- ② 身体状況への自信が高く満足度が高い程、充実感がある傾向がみられた。
- ③ 生活充実に影響を及ぼす要因として、体力自信、スポーツ生活への満足、年収、職場、近所づき合いという要因の寄与度が高かった。
- ④ 健康行動をしているか否かの判別寄与要因として、年収、健康不安、年齢、職業、性別が都市地区に、年齢、健康状態、職業、健康関心、通勤方法が非都市地区にあげられた。
- ⑤ 都市地区の運動実施率が低いことが明らかにされた。
- ⑥ 運動頻度、費用、施設という要因が運動・スポーツ生活の満足度に寄与することが明らかにされた。

* 東京都立大学都市研究センター・理学部

** 東京都立大学理学部

*** 東京家政大学

I はじめに

1. 研究の目的

スポーツの大衆化傾向と合わせスポーツは隆盛状況を呈している。それが現代社会の多様な価値観を反映しているとはいえ、種々の要因の規定を被りながら行動として現われている(徳永他⁸⁾ 1985)。その中でも、都市地区居住と非都市地区居住の差が及ぼす影響は、都市問題の諸相と合わせ、一つの大きな社会的問題と考えられよう。つまり、大都市居住による生活環境的条件は、生活意識や価値観への影響もさることながら、人間存在の基本的要件である健康や体力、およびそれに裏打ちされた運動・スポーツ行動に対して非常に大きな要因となっていると見なされる。その端的な事例は、脱都会志向の増加傾向や自然回帰ニーズの高まりであろう。

このような都市問題に関する都市居住者の健康・体力や運動生活の諸問題について、これまでいくつかの報告を提示してきた(中村他⁷⁾ 1975、飯塚他⁹⁾ 1977、永田他⁸⁾ 1979)。特に永田らは集合住宅居住者達の運動意識について、下町を代表される団地と都市計画に基づいて設計された多摩地区とを比較して、運動不足には都市の地域差のないこと、およびスポーツ実施度は現在おかれている環境や生活上の意識に強く影響されていることを報告している。

本報告では、この結果に基づいて、居住形態差を都市地域と非都市地域に限定し、この居住地域差が、住民の生活意識や健康・体力意識、および運動・スポーツ意識に及ぼす影響を、諸々の要因を有機的に分析することによって推定しようとしている。このような基礎的資料によって、居住環境の持つ規定性を特に三つの生活側面(生活行動、健康行動、運動・スポーツ行動)における満足度や充実度という主観的判断をもとに明らかにしようとするものである。

2. 研究の方法

調査方法はアンケート調査法を用いた。調査対象は都市地区として東京都内の赤羽地区の集合住宅地域を選定した。非都市地区としての対象は、準農村地域として、静岡市近郊地区および、千葉県北柏近郊の比較的田園地域を選定した。なお、両者の中間形態地区として、神奈川県青根、島屋地区を対象として抽出した。

(1) 調査内容

調査票は次の三部門から構成され、主たる内容は以下の通りである。

- A. 生活意識 (① 充実感、② 生活感 ③ 社会的価値意識)
- B. 健康・体力意識 (① 健康状態 ② 自覚症状 ③ 健康関心 ④ 健康情報 ⑤ 健康行動 ⑥ 健康重要度 ⑦ 体力状態)
- C. 運動・スポーツ意識 (① 過去のスポーツ経験 ② 将来のスポーツ・ニーズ ③ 過去1年間の運動・スポーツ行動……実施頻度、実施理由、運動仲間、運動施設、経費、移動方法、スポーツ行事、スポーツ満足度、④ スポーツ阻害要因)

(2) 調査対象の属性

調査対象の属性は表1に示す通りである。赤羽地区と神奈川県に主婦が多い傾向が窺え、当然のことながら、千葉-静岡地区に専業農業が多くなっている。ちなみに神奈川県は日曜日に農業をする兼業農家も多いことを付記しておく。なお世帯構成から赤羽の都市地域は核家族が多いことが顕著である。

(3) 結果の処理

主として三地域別に基礎的統計を集計した。生活意識は健康や運動・スポーツ生活との相補的關係をもって Good Life (生活の質、安寧) 実現に寄与するという前提に基づいて、要因間の相互関係や寄与度を分析するために、クロス分析、数量化

表1 調査対象の属性

アイテム	カテゴリー	神奈川		千葉・静岡		赤羽	
		男(125)	女(132)	男(135)	女(67)	男(88)	女(139)
年 齢	20～29歳	4.0%	5.3%	20.0%	25.4%	5.7%	6.5%
	30～39	8.8	28.8	25.2	35.8	1.1	12.9
	40～49	70.4	30.3	27.4	23.8	67.0	69.1
	50～59	16.0	5.3	22.2	11.9	25.0	11.5
	60～69	0.8	0	5.2	3.0	1.1	0
職 業	農 林 水 産 業	4.8%	2.3%	26.9%	23.5%	0%	0%
	商工・サービス業	12.0	8.3	3.0	2.9	20.2	6.6
	自 由 業	11.2	6.1	9.0	1.5	21.3	2.9
	管 理 職	14.4	0.8	10.4	1.5	10.1	0.7
	専 門 技 術 職	32.8	7.6	14.9	10.3	27.0	11.7
	事 務 職	10.4	7.6	21.6	32.4	2.2	10.9
	労 務 職	12.0	8.3	11.9	7.4	18.0	16.8
	主 婦 そ の 他	—	54.5	—	17.6	—	39.4
世帯形態	単 身	1.5%(266名)		6.3%(207名)		0.9%(230名)	
	夫 婦 の み	0.8		5.8		1.3	
	夫 婦 と 子 供	53.8		35.7		73.9	
	親と夫婦と子供	40.2		38.6		9.6	
	そ の 他	3.8		13.5		14.3	
収 入	200万円未満	30.2%(202名)		30.3%(198名)		38.8%(188名)	
	300万円 "	16.8		23.7		22.9	
	400万円 "	18.3		18.7		13.6	
	500万円 "	19.3		14.1		10.1	
	600万円 "	5.9		8.6		6.4	
	700万円 "	6.4		2.5		4.3	
	700万円以上	3.0		2.0		3.2	

理論Ⅱ類・Ⅲ類の手法を用いた要因分析と類縁関係のパターン分析を試みた。分析の視角と分析のフローは図1に示す通りである。

なお、統計的処理にあたっては、東京都立大学計算機センターの大型コンピューターを利用した。

Ⅱ. 結果と考察

1. 生活意識の構造

本節では、健康、体力、スポーツ意識に関連する生活意識について、都市地区、非都市地区（準農村地区と中間形態地区）の居住環境別に分析した。図2に示したように、生活意識は、健康・体力に関する意識、スポーツ活動に対する意識と相補的

に個人の豊かな生活を規定すると考えられる。本調査では、この生活意識を、生活感、充実度、社会的価値意識の三側面から捉え、総理府の国民生活意識調査の質問項目をも援用することとした。本報告では、生活についての充実度をキーコンセプトとし、三地区別の充実—非充実を縦糸に、他の生活意識の諸相を比較検討する方式をとっている。また必要に応じて、健康・体力やスポーツ行動の意識に関する項目を分析に加えることとした。

(1) 生活の充実度

表2, 3は三地区別の生活充実度の概要を示している。57%強の人が充実感を感じていると回答しているが、地区別傾向はさほど窺えないといえる。

1. 生活行動分析

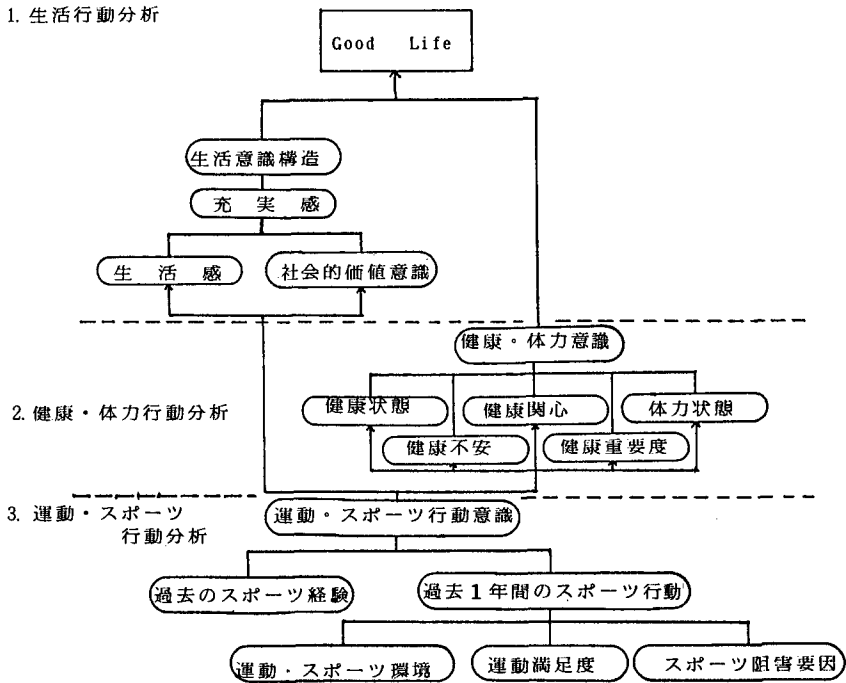


図1 分析枠組のフロー（1.2.3.は節の構成を示す）

強いて挙げるとすれば、都市地区居住の赤羽地区に充実感をあまり感じないという回答が多い傾向がみられる一方で、十分充実という生活感を感じている人も見受けられるという両極化傾向が窺える。以下の考察ではこの5段階尺度を、充実しているグループ（十分充実+まあ充実）と充実して

いないグループ（どちらともいえない+あまり充実していない 全く充実していない）に二分して検討することにした。

なお、総理府の国民生活調査（1981年）では70%強の人が充実感を感じていることに比べ、三地区とも充実度が低いといえる。

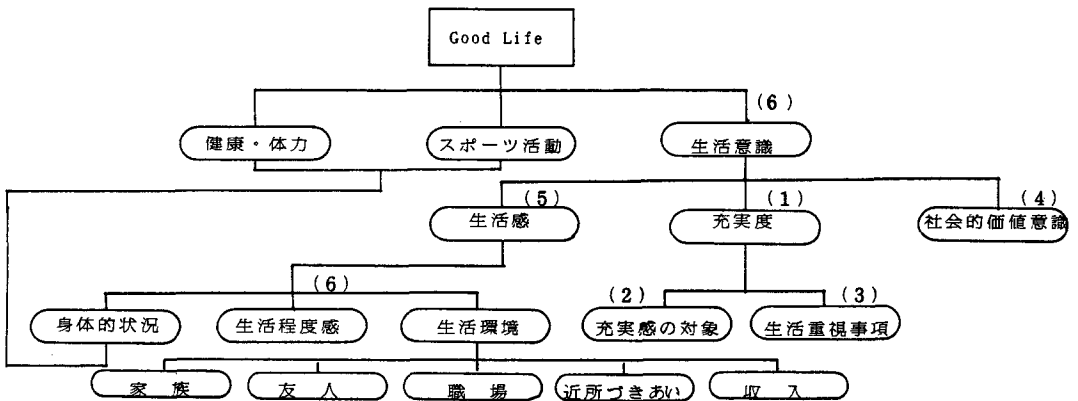


図2 生活意識の関係構造（()内の数字は本節の項を示す）

表2 生活の充実度（地区別－5段階）

地区 充実感	神奈川	千葉-静岡	赤羽	計
十分充実	16 32.0% 5.8%	12 24.0 5.7	22 44.0 9.2	50 — 6.9
まあ充実	140 38.5 50.9	114 31.3 53.8	110 30.2 46.2	364 — 50.2
どちらとも いえない	80 43.7 29.1	45 24.6 21.2	58 31.7 24.4	183 — 25.2
あまり充実 していない	28 30.1 10.2	26 28.0 12.3	39 41.9 16.4	93 — 12.8
全く充実し ていない	1 14.3 0.4	1 14.3 0.5	5 71.4 2.1	7 — 1.0
Missing	10 35.7 3.6	14 50.0 6.6	4 14.3 1.7	28 — 3.9
計	275 37.9 —	212 29.2 —	238 32.8 —	725 100 —

表3 生活の充実度（地区別－2段階）

地区 充実感	神奈川	千葉-静岡	赤羽	計
充実して いる	156 37.7% 56.7%	126 30.4 59.4	132 31.9 55.5	414 — 57.1
充実して いない	109 38.5 39.6	72 25.4 34.0	102 36.0 42.9	283 — 39.0
Missing	10 35.7 3.6	14 50.0 6.6	4 14.3 1.7	28 — 3.9
計	275 37.9 —	212 29.2 —	238 32.8 —	725 100 —

(2) 充実感を感じる時

表4は充実感を感じている人が、日頃の生活の

表4 充実感を感じる時

地区(充実し ている人) 充実感を感じ る時	神奈川 (N=156)	千葉-静岡 (126)	赤羽 (132)
1. 仕事	74.4%	61.1%	59.1%
2. 勉強・教養	14.1	14.3	7.6
3. 趣味・スポーツ	51.3	43.7	34.8
4. 休養	31.4	42.9	47.0
5. 家族団らん	69.2	63.5	73.5
6. 友人・知人と話す時	34.6	37.3	43.9
7. 社会奉仕など	16.0	18.3	12.1
8. その他	0	1.6	0

中でどのような時に充実感を感じるのかを示したものである。三地区とも、「仕事に打ち込んでいる時」「家族団らんの時」に半数以上の人が出発感を感じると答えている。「勉強・教養」「社会奉仕・社会活動」などの自己能力開発や奉仕性に対して充実感を感じない人が少ないことも合わせ、都市地区、準農村地区、中間形態地区とも、仕事と家庭の二つが中心的生活構造であることを示唆している。

地区別の傾向として、都市型の赤羽地区に「家族団らん」「友人・知人との談話」「休養」に対して充実感を感じる人が多いのは、この地区の構成員に主婦層が多いことからの影響が推察される。中間地区の神奈川地区に仕事に対して充実感を感じる人が多い一方で、趣味やスポーツに熱中している時に充実感を感じる人が多いという傾向が窺える。これはスポーツをする場所に恵まれているのではないかとということが地域的特性から推測されよう。

(3) 充実させたいと思う生活側面

充実感を感じている人と充実感を感じていない人とを地域性を考慮して、充実させたいと思っている生活側面ごとに整理したのが表5である。三地区とも共通に充実欲求として挙げているものは、「子どもの教育」「健康・体力」「幸福な家庭」という、地域性を超えた人間としての普遍的な生活側

表5 充実感している人/充実感していない人の充実させたいと思う生活面(地域別)

充 実 地 区 アイテム	充 実 して いる 人			充 実 して いない 人		
	神奈川 (N=156)	千葉-静岡 (126)	赤 羽 (132)	神奈川 (109)	千葉-静岡 (72)	赤 羽 (102)
1. 子どもの教育	69.9%	55.6%	48.5%	58.7%	45.8%	43.1%
2. 自分の能力の開発	25.0	23.0	24.2	30.3	19.4	21.6
3. 自分の趣味・レジャー	42.3	46.0	38.6	39.4	38.9	31.4
4. 自由時間,行動の自由	22.4	27.0	18.2	31.2	34.7	32.4
5. 健康・体力	71.2	55.6	58.3	66.1	52.8	56.9
6. 長 生 き	23.7	34.1	18.9	23.9	30.6	29.4
7. 美 容	3.2	5.6	9.8	9.2	1.4	8.8
8. 友人・相談相手	11.5	23.8	13.6	14.7	13.9	16.7
9. やりがいのある仕事	34.6	31.7	35.6	27.5	26.4	27.5
10. 社会的高い位置	2.6	7.9	2.3	1.8	9.7	1.0
11. 幸福な家庭	75.0	66.7	71.2	59.6	58.3	65.7
12. 近所づきあい	35.9	31.8	33.3	35.8	30.6	32.4
13. 貯蓄・利殖	16.7	33.3	22.7	20.2	23.6	37.3
14. 土地・住宅	13.5	16.7	17.4	19.3	15.3	28.4
15. 豊かな衣・食生活	17.9	23.8	24.2	27.5	22.2	31.4
16. 職場生活	23.7	31.0	19.7	9.2	20.8	21.6
17. 地域奉仕・社会活動	19.2	17.5	11.4	10.1	5.6	4.9

面への志向である。前項で示された充実感を感じる時の二大傾向の一つであった「仕事」への志向が低いことが特異な傾向である。これに続いて「自分の趣味・レジャー」「近所づきあい」という自己の豊かな生活設計や近隣の人間関係への志向が高くなっている。以前に行なった同項目の調査(永田他⁶⁾, 1979)では, 都市型生活者の要求には, 健康, 教育, 幸福な家庭という項目が上位を占めていた。今回も同じ傾向を示しているが, 土地・住宅, 貯蓄などに比べ自分の趣味やレジャー, 近所づきあいなどへの志向の高まりは, 豊かさを象徴するのがあるいは諦観によるものなのか価値観の変化によるものなのか, 詳しい検討を要するといえよう。

地域性を考慮すると, 神奈川地区は「子どもの教育」への充実志向が他地区よりも高い傾向が窺える。それは充実群と非充実群双方にいえ。千葉-静岡の準農村地区では, 長生き志向, 友人や

相談相手, 貯蓄・利殖という地域性と推察される生活側面への志向がみられる。赤羽の都市集合型住宅地域では, 特に非充実群に「貯蓄・利殖」「土地・住宅」「豊かな衣・食」という豊かな生活を求めた切実な物質志向が窺える。充実群では, 地域奉仕や社会活動, 近所づきあい, 職場生活など, 個人に近接した生活構造ではなく, 社会的な生活側面への志向が若干ながらも窺える。

図3は三地区を合計した充実したい生活側面の類縁関係を示したものである。累積寄与率がⅢ軸までで27.7%と低いため元データの大半の属性が捨象される危険性があるにせよ, 三地区を総合した一応の生活価値志向を示しているといえよう。Ⅰ軸方向は家庭志向-能力志向, Ⅱ軸は個人志向-社会志向という傾向が窺える。二次元空間に布置された17の生活領域は図のように「生活の豊かさ」「平和な家庭」「自己の能力開発」という三つの大きな群にまとめられる。

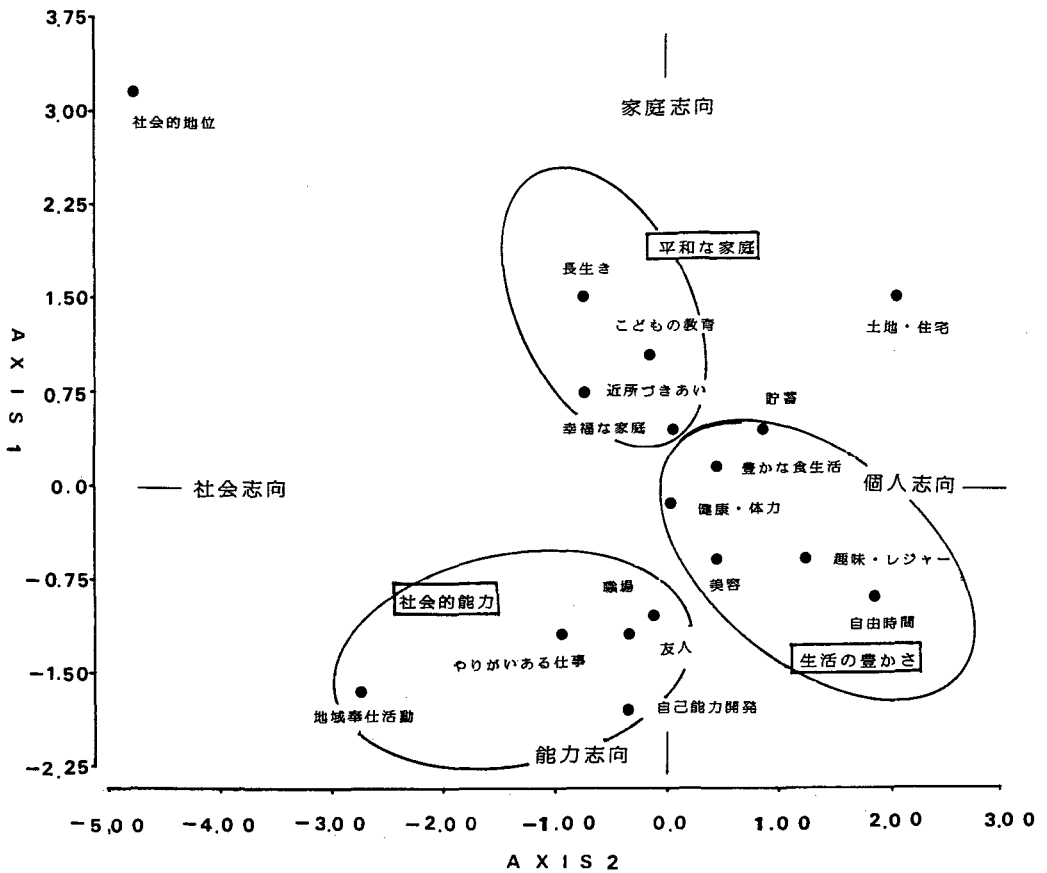


図3 充実したい生活側面の類縁関係

表6 充実感と大切な心の満足度

アイテム (満たされている7つの心)	充実 地区	充実している人			充実していない人		
		神奈川 (N=156)	千葉-静岡 (126)	赤羽 (132)	神奈川 (109)	千葉-静岡 (72)	赤羽 (102)
1. 平和な家庭を求める心		77.6%	72.2%	77.3%	56.0%	56.9%	44.1%
2. 生活に変化を求める心		30.1	29.4	34.8	20.2	15.3	7.8
3. 未来に期待する心		38.5	29.4	47.0	18.3	9.7	12.7
4. 人間関係を大切にする心		69.9	54.8	75.6	50.5	52.8	13.7
5. 自由を求める心		44.9	34.1	44.7	22.9	27.8	18.6
6. 自分を表現する心		41.0	31.0	49.2	15.6	20.8	16.7
7. 真・善・美を求める心		49.4	33.3	46.2	24.8	20.8	21.6

表7 充実感を感じている人に満たされている7つの心(要因分析)

アイテム	カテゴリー	サンプル数	Weight	Range	偏相関係数
1. 平和な家庭を求める心	1. 満たされている	414	-0.2500	0.9402	0.1499
	2. 満たされていない	150	0.6901		
2. 生活に変化を求める心	1. "	159	-0.0944	0.1314	0.0207
	2. "	405	0.0370		
3. 未来に期待する心	1. "	188	-0.6392	0.9588	0.1574
	2. "	376	0.3196		
4. 人間関係を大切に作る心	1. "	370	-0.0822	0.2391	0.0388
	2. "	194	0.1569		
5. 自由を求める心	1. "	219	-0.1502	0.2456	0.0410
	2. "	345	0.0954		
6. 自分を表現する心	1. "	201	-0.2998	0.4659	0.0686
	2. "	363	0.1660		
7. 真・善・美を求める心	1. "	225	-0.1029	0.1712	0.0269
	2. "	339	0.0683		

n=725 (有効数 564)

相関比(固有値)=0.143

(4) 生きがい充実感と7つの欲求

表6は生きがい充実のある人および充実感の無い人が、生活上大切にしている生きがいを求める7つの欲求(神谷²⁾1976, 舛本他⁴⁾1979)に対して満たされている(十分満たされている+まあ満たされている)と答えた割合を地区別に示したものである。三地区とも充実感を感じている人の方が7つの心の満足度が高いという当然予想される結果が示されている。「平和な家庭」「人間関係」に対する満足度は地域性を超えてまた充実感を超えて満たされている心である。逆に生活に直結していない側面である、生活変化、未来性、自由、自己表現、価値への満足度は低いといえる。

地区別に検討を加えると、準農村地区である千葉一静岡の充実群に全体的に満足度が低く、都市地区の赤羽では生活変化、未来期待、人間関係、自己表現などへの満足度が高いといえよう。

表7は充実感に及ぼす7つの欲求の要因関係を示したものである。これは地区を超えて林の数量化理論を用いて7つの欲求の充実感への関与度を分析している。この表に示されているウェイトとそのレンジによれば、生活の充実感に影響すると思われる項目は「平和な家庭」「未来への期待」の二つであり、「自己表現」がやや関与していること

が明らかである。偏相関係数からみると、「平和な家庭」「未来への期待」の影響度が窺える。つまり、自由、自己表現、価値といった現実の切実な生活構造から遊離した項目の影響度は少なく、現実志向(家庭)と現実回避(未来期待)の両方向が生生活充実感を規定する要因であることが窺える。

(5) 生活充実と生活感

充実感を感じている人と充実感を感じていない人が、それぞれ他の生活感にどのように反応しているかをみたものが表8である。ここで生活感(身体状況(健康状態, 体力自信度, スポーツ生活の満足度), 生活程度感(総理府の生活意識調査—上, 中上, 中中, 中下, 下という所属意識), 生活環境(収入, 家庭, 友人, 職場, 近所づき合い)の9つの要因から構成されている。

体力自信度では三地区とも充実群が自信有りとなし、逆に非充実群が体力に自信のない傾向が窺える。都市地区である赤羽地区に体力に自信がない傾向がみられる。

同じことは、スポーツ生活への満足度にもいえる。しかし、いずれの地区も体力の自信、スポーツ生活への満足の割合は低く、地域性を超えて身体状況への満足度は低いといえよう。ちなみに、

表8 充実感を感じる人/感じない人の他の生活面での意識

アイテム	カテゴリー	充実	充実している人			充実していない人		
		地区	神奈川 (N=156)	千葉-静岡 (126)	赤羽 (132)	神奈川 (109)	千葉-静岡 (72)	赤羽 (102)
体 力	自 信 あり		36.5%	44.4%	41.7%	29.4%	19.4%	20.6%
	どちらともいえず		52.6	45.2	42.4	52.3	56.9	56.9
	自 信 なし		8.3	9.5	12.9	17.4	19.4	22.5
スポーツ生活への満足度	満 足		37.8	35.7	32.6	18.3	13.9	8.8
	どちらともいえず		26.9	23.8	20.5	39.4	29.2	18.6
	不 満		17.9	15.1	15.9	22.0	19.4	20.6
生活程度感	上 + 上 ・ 中		7.1	6.3	9.1	8.3	2.8	4.9
	中 ・ 中		60.9	53.2	53.8	44.0	37.5	28.4
	中 ・ 下 + 下		10.9	20.6	20.6	27.5	41.7	42.2
年 収	200万円未満		17.3	28.6	28.0	30.3	31.9	34.3
	300 "		10.3	22.2	16.7	16.5	22.2	20.6
	400 "		12.8	15.9	9.8	14.7	18.1	12.7
	500 "		18.6	14.3	9.1	9.2	12.5	5.9
	600 "		5.1	9.5	6.8	3.7	6.9	2.9
	700 "		7.1	4.0	6.1	1.8	0.0	0.0
	700万円以上		3.2	2.4	2.3	0.9	1.4	2.9
近所づきあいの なごやかさ	あてはまる		78.2	53.2	67.4	48.6	44.4	42.2
	どちらともいえない		11.5	34.9	20.5	30.3	38.9	36.3
	あてはまらない		2.6	7.9	6.8	6.4	11.1	13.7
気がねなくつきあえる 友人が多い	あてはまる		57.7	52.4	62.9	41.3	40.3	33.3
	どちらともいえない		26.3	34.1	21.2	34.9	40.3	37.3
	あてはまらない		7.7	9.5	11.4	11.0	13.9	23.5
家庭でくつろげる	あてはまる		84.6	81.0	90.2	69.7	73.6	74.5
	どちらともいえない		5.8	11.9	3.0	11.0	19.4	14.7
	あてはまらない		1.9	4.0	3.8	8.3	5.6	7.8
職場の雰囲気になごやか	あてはまる		50.0	47.6	58.3	33.0	27.8	40.2
	どちらともいえない		16.7	33.3	15.2	33.9	48.6	28.4
	あてはまらない		6.4	6.4	7.6	8.3	11.1	14.7
健 康 状 態	良 好		19.9	31.7	22.7	—	—	—
	普 通		69.2	63.5	64.4	—	—	—
	あまりよくない		10.3	4.8	11.4	—	—	—

健康状態については充実群のみのデータが示されているが、準農村地区に良好という回答が多く、何らかの地域性を示していると推察されるが、詳細は別の機会に検討したい。

生活程度感では中流社会の意識構造が見事なまでに反映されているため、グルーピングを上+中上、中中、中下+下という三類型で分析してみた。充実群の方が生活程度感を高く判断する傾向がみられる。収入の要因と合わせて検討すれば、非充実群の年収が少ない傾向が窺え、充実感に年収に基づいた生活程度感が影響することが予測される。ちなみに、神奈川地区（中間形態）は他地区と比べ、年収も高く生活程度感も高く判断する傾向が

みられた。

生活環境の4要因である、近所づき合い、気がねのない友人、家庭でのくつろぎ、職場の雰囲気という項目では、充実群が非充実群に比べよく当てはまるという回答が多い。特に神奈川地区充実群の近所づき合いの割合は大である。赤羽地区は都市型で主婦層が多いという特徴と合わせ、近所づき合い、気がねのない友人に対する否定的判断が非充実群に多い傾向が窺える。これは人間関係要因の生活充実への影響度が大であることを推定させよう。

表9 生活充実感の要因分析 (三地区合同)

アイテム	カテゴリー	Weight	Range	偏相関係数
1. 健康状態	良 好	0.2638	0.6837	0.0963
	普 通	-0.0202		
	あまり良くない	-0.4198		
2. 体力への自信	自信あり	0.0977	0.9451	0.1420
	どちらともいえない	0.0872		
	自信なし	-0.8473		
3. スポーツ活動の満足感	非常に満足	0.6424	1.0660	0.1784
	満 足	0.3623		
	どちらともいえない	-0.1286		
	不 満	-0.4235		
	非常に不満	-0.1293		
4. 年 収	200万円未満	-0.3505	1.1705	0.1664
	300 "	-0.0884		
	400 "	-0.1003		
	500 "	0.3283		
	600 "	0.2869		
	700 "	0.8200		
	700万円以上	0.2893		
5. 家庭でくつろげる	1. 良くあてはまる	0.2846	0.8733	0.1552
	2. どちらかといえはあてはまる	-0.2850		
	3. どちらともいえない	-0.4073		
	4. どちらかといえはあてはまらない	-0.1374		
	5. あてはまらない	0.4659		
6. 気がねなくつきあえる友人が多い	1.	0.2877	0.6175	0.1281
	2.	0.1380		
	3. 同 上	-0.3297		
	4.	-0.0256		
	5.	-0.2529		
7. 職場の雰囲気なのがよか	1.	0.6687	1.0445	0.1876
	2.	-0.0511		
	3. 同 上	-0.3297		
	4.	-0.3758		
	5.	0.0044		
8. 近所づき合いなのがよか	1.	-0.4400	0.9417	0.1619
	2.	0.2765		
	3. 同 上	0.1071		
	4.	-0.3285		
	5.	-0.6651		

相関比(固有値)=0.227 n=378

(6) 生活充実感の要因分析

以上の生活感に基づいて、三地区を合同した形で各要因がどのように生きがい充実感に関与しているのかを詳しく分析するために、林の数量化理論Ⅱ類を用いて分析した。外的基準としては生活に対する充実感で十分充実、まあ充実したと回答したものとし、説明変量としては、身体状況に関するもの3要因(健康状態、体力自信度、スポーツ生活への満足度)、生活程度に対応するものと考えられる年収、および生活環境に関わる4要因(家庭でのくつろぎ、気がねのない友人、職場の雰囲気、近所づき合いのなごやかさ)の計8要因とした。全要因への有効回答は378名(充実群=243,非充実群=135)である。結果は表9の通りである。

各要因毎に充実感への関与を検討するならば、健康状態が良い程充実感にプラスに寄与している。体力自信度も高い方が寄与度が高く、スポーツ生活の満足度も高い程充実感が高くなる関係が窺える。身体状況が良い程、充実度も高くなるのがここから推定されよう。年収は多くなる程生活充実に寄与する傾向が見られる。気がねなくつきあえる友人が多いことがよく当てはまる人も、生きがい充実が高くなっている。但し、家庭でのくつろぎ、職場の雰囲気、近所づき合いのなごやかさという要因にはそういった直線的な寄与はみられない。

各要因の充実度に占める寄与の重みづけとそのレンジをみると、体力、スポーツ活動、年収、職場、近所づき合いの要因の寄与度が高い傾向が示されている。中でも年収のレンジが最大であり、生活充実に占める金銭的意識の重要性が推察される。偏相関係数を参考にすれば、各要因間にはさほど影響差が見られない。しかしながら、健康状態の寄与度の低さは、健康が意識に登ってくるのは、病気の時とかケガをした時であって、日常的には潜在的であるという健康感の位相に起因する現象であると解釈せざるを得まい。しかし、一方では、充実感を感じる人が充実させたいと思っている項目として、健康・体力、平和な家庭という二大要因が挙げられていることとも合わせ、未だ

獲得されていないがために充実感への寄与度が不明であるのかもしれない。これは今後の大きな課題であると思われる。

2. 都市における健康行動の要因パターン

本節では、複雑で問題の多い都市における健康問題を、Host—Environment(植村¹⁰⁾1978)の係わりから解明するための基礎的段階として行動に焦点を合わせ、その分析を試みた。特に、都市における特徴的パターンを非都市地域との比較により捉え、総合的・相対的に把握した。比較検討の際、不適情報の混在を極力避け、特徴をより単純化・明確化させる等の理由で、ここでは神奈川地域だけを比較対象地域とした。また、健康行動を「健康を意識してとる行動」に限定して解釈した。分析には、林の数量化理論第Ⅱ類を用い、健康行動の有無を外的基準として、要因群の関与の状況をみた。要因には、保健的認識に含まれる事項を4項目、対象の属性を示す基礎的事項を4項目、社会的・経済的関連事項を4項目、その他健康行動への関与が大きいと思われる内容を3項目、合計15項目を選定した。結果は表10に示す通りである。

表10は健康行動の有無に対する各要因の判別への寄与を地域別に示したものである。最初に、都市地域の場合をみると、健康行動をしているか否かへの判別には、「年収」(偏相関係数 0.32, レンジ 1.783), 「健康不安」(同 0.31, 同 1.494), 「年齢」(同 0.27, 同 1.036), 「職業」(同 0.27, 同 1.071), 「性別」(同 0.25, 同 0.915), 「体力状態」(同 0.24, 同 0.681), 「通勤方法」(同 0.23, 同 0.943), 等が大きな影響を及ぼしている。この傾向は、結果的に健康行動に結びつく要因として、いわゆる外的条件といわれる社会的・経済的要素が働くこと、また、自己の健康についての不安の程度の影響も大きいことを示している。また、健康の位置づけ・関心等健康論的認識の関与は小さいことがわかる。次に各要因におけるカテゴリー間の影響の傾向をみると、「年収」では、高低両極端の場合が健康行動に対し負方向に作用する結果となっている。

年収を生活的余裕と結びつけて考えてみるならば、生活上のほどほどのゆとりが健康行動に必要なことを示唆するものといえる。「健康不安」では、健康に対し不安を感じない場合が正に、不安をしばしば感じるような場合に負方向に作用している。予防医学的立場から健康行動を捉えたと、むしろ後者のケースがより強い行動促進要因として働くことが望まれる。さらに「年齢」では、年齢層が高くなるにつれて正方向に作用する傾向がみられる。これは、よくいわれる中高年の健康・体力づくり的運動の普及との係わりが大きいものと推察できる。尚、この都市地域の場合の誤判別率は約20%で判別点は約0.13であった。

次に非都市地域についてみる。健康行動の有無の判別への寄与の大きい項目は、「年齢」(偏相関係数 0.37, レンジ 3.963), 「健康状態」(同 0.34, 同 1.694), 「職業」(同 0.32, 同 1.613), 「健康関心」(同 0.29, 同 0.867), 「通勤方法」(同 0.26, 同 2.155), 等である。これをみると、性・年齢や社会的要因に加えて、健康の認識的要素の関与が強いことが特徴としてあげられる。各要因のカテゴリーをみると、「年齢」では前述の都市地域の場合と同様に、年齢層が高くなるに従い、健康行動に正方向に寄与する傾向が読みとれる。「健康状態」では、自己の健康状態を良好と判断していることが正に、不調と感じていることが負方向に作用している。これについては、都市地域の場合の「健康不安」と同様の解釈ができよう。また、「職業」をみると、自営的職業で負に、被傭的職種で正方向に寄与していることが興味深い。これは、労働時間面の制約等の関与があると推測されるが、都市地域ではこの傾向が認められないため、地域の特徴の一つと考えることができる。「健康関心」においては、関心を強く持っている程行動に結びついている傾向がある(これは自明の感が強いが、健康行動と健康関心との間には統計的有意差が認められなかったことを付記しておく)。尚、非都市地域における誤判別率は約25%、判別点は約0.10であり、両地域とも同程度の判別精度であった。また、「学歴」、「生活充実感」、「結婚状態」等は、両地域ともに判別への寄与が小さく、要因としては無視できるも

表10 健康行動をしているか否かの要因分析結果

(数量化Ⅱ類による)

番号	アイテム	カテゴリー	ウエイト等		レンジ		偏相関係数	
			都市	非都市	都市	非都市	都市	非都市
1.	健康状態	良	0.081	1.200	0.657	1.694	0.16	0.34
		まあ普通	-0.122	-0.196				
		不	0.535	-0.494				
2.	健康不安	全くなし	0.786	-0.286	1.494	0.847	0.31	0.16
		時々あり	-0.077	-0.022				
		しばしばあり	-0.708	0.561				
3.	健康関心	あり	0.075	0.316	0.850	0.867	0.16	0.29
		まあまあ	0.040	-0.474				
		なし	-0.774	-0.552				
4.	健康重要度	重	0.048	0.011	1.296	0.231	0.17	0.03
		まあまあ	-1.248	-0.220				
		重要でない	0.000	0.000				
5.	体力状態	あり	-0.454	0.254	0.681	1.198	0.24	0.20
		まあまあ	0.427	-0.019				
		なし	0.183	-0.945				
6.	運動部経験	あり	0.248	0.215	0.473	0.450	0.16	0.15
		なし	-0.226	-0.236				
		あり	-0.139	0.060				
7.	生活充実感	あり	0.141	-0.178	0.339	0.441	0.11	0.09
		まあまあ	0.200	0.263				
		なし	0.200	0.263				
8.	年齢	30歳未満	-0.013	-2.876	1.036	3.963	0.27	0.37
		30歳代	-0.295	-0.200				
		40歳代	-0.183	0.023				
		50歳以上	0.741	1.088				
9.	性	男	-0.385	-0.239	0.915	0.695	0.25	0.24
		女	0.530	0.456				
10.	結婚状況	既婚	0.458	0.668	0.490	0.725	0.08	0.13
11.	同居状況	未婚	-0.032	-0.057	2.164	2.394	0.19	0.13
		単身	-2.030	1.362				
		夫婦のみ	0.026	-1.033				
		二世帯	0.027	0.005				
12.	学歴	三世帯	0.133	-0.063	0.171	0.045	0.05	0.01
		義務教育	-0.091	0.022				
		中等教育	0.080	-0.023				
		高等教育	0.032	-0.011				
13.	職業	農・林・水産	0.000	-0.095	1.071	1.613	0.27	0.32
		商工・サービス	-0.061	-1.020				
		自由	0.482	-0.490				
		管理職	-0.329	0.141				
		専門・技術職	0.464	0.303				
		事務職	-0.589	0.060				
		労務職	-0.202	0.593				
		主婦	-0.390	-0.106				
14.	通勤方法	徒歩	-0.304	0.356	0.943	2.155	0.23	0.26
		自転車	0.409	-1.621				
		バイク	0.258	0.286				
		自家用車	0.138	-0.065				
		バス	-0.534	-0.582				
15.	年収	電車	-0.084	0.533	1.783	1.932	0.32	0.19
		200万円未満	-0.677	-0.116				
		200万円台	0.004	0.136				
		300万円台	0.326	0.220				
		400万円台	1.106	0.088				
		500万円台	0.331	-0.302				
		600万円台	0.557	-0.294				
700万円以上	-0.061	-1.712						

{ 都市地域 : n = 107 }
 { 非都市地域 : n = 128 }

表11 偏相関係数に基づく各アイテムの順位づけ

項目番号 \ 順位	1位	2位	3位	4位	5位	6位	7位	8位	9位	10位	11位	12位	13位	14位	15位
都市	15	2	8	13	9	5	14	11	4	1	3	6	7	10	12
非都市	8	1	13	3	14	9	5	15	2	6	11	10	7	4	12

のと思われる。

以上の結果を総合してみると、健康行動をしているか否かの判別に寄与する要因は、その寄与程度・構成等において、両地域間で何等かの差異を有することが推測される。以下では、その傾向を一種のパターンとして捉え、特徴を探ってみた。まず、外的基準との関連程度を示す偏相関係数に着目し、その大きさの順に各項目に順位をつけ、順位ごとに並べてみた(表11)。ここではその結果に基づき考察する。偏相関係数のある程度大きい項目(ここでは0.2以上を目安とした)を中心として、各地域ごとにその特徴をひろってみると、都市地域においては、年収、職業、年齢、性等という、いわゆる外的要因事項に属する内容が多いことが目につく。また、健康不安の存在が重要となっている。非都市地域の場合は、健康・体力状態の評価、健康関心といった健康論的認識に含まれる内容が多くみうけられ、性・年齢等のデモグラフィック要素も無視できない要因となっている。このような傾向が両地域における要因群のパターンの特徴を示すものと考えられ、これを要因パターンにおける地域差と捉えることができよう。この傾向は、表11における各要因を一つの要因グループ(ここでは上位7位までが対象となる)と考え、両地域共通に出現する項目を消却してみると、より一層顕著に現われてくる。つまり、都市地域では健康に対する不安及び収入が残り、非都市地域では健康状態の評価・関心が残ることになる。これを踏まえ推論するならば、都市地域での存在は健康に対する不安を強く意識させるような、いわゆる都市的環境に左右され、それが結果として積極的健康に結びつく「行動」への刺激要素となっていると考えることができよう。換言すれば、健康的存在そのものが、積極的態度・行動等、健康へ向けての努力なしには維持できない、といわれる現代の文明・社会的諸事情の象徴を都市にみ

ることができるわけである。

3. 運動・スポーツ生活

(1) 実施種目

過去1年間に実施した種目について、表12の55種目の中から、1人最高5種目まで記録させた。神奈川地区、千葉・静岡地区、赤羽地区の三地区間には、実施者の割合に差が見られるとともに、運動、スポーツ選択の仕方にも違いが見られた。表13に示したように、過去1年間に何らの運動スポーツを実施した人は、神奈川地区で8割、千葉静岡地区で7割であったが、赤羽地区では6割に達していない。また、実施種目を軽運動、野外スポーツ、競技スポーツにまとめると、軽運動については、神奈川、千葉・静岡、赤羽の順に実施率が上がっていき、競技スポーツについては、同じ順に実施率が下がっている。野外スポーツの実施率は3地区ともほぼ同じであった。

次に3地区をまとめて見た場合、よく実施された種目を、よく実施された順に表14に載せた。男女とも、手軽に実施できるアクセシビリティの高い種目の実施度が高いことが窺える。

(2) 運動場所

運動場所については、近くの学校の運動施設、公営の運動施設、民間の運動施設、野外(海・山・川・湖)、自宅や近所の空地、公園、その他の7項目の中から、過去1年間に最もよく使ったものを1つだけ選ばせた。その結果は、表15に示すように、地区間に明確な差が見られた。神奈川地区でよく使用された運動場所は、近くの学校の施設と自宅や近所の空地であり、この2つの場所で7割近くの人が運動したことになる。この地区では、公営の運動施設、民間の運動施設、公園などの場所は利用される割合が少ない。千葉・静岡地区の

表12 実施運動種目の選択肢

＜比較的軽い運動＞		＜野 外 ス ポ ー ツ＞		＜競 技 ス ポ ー ツ＞	
1 キャッチボール	13 スキー	25 狩猟(ハンティング)	34 体操競技	46 テニス	
2 羽根(バドミントン)	14 ローラースケート	26 ワンダーフォーゲル	35 陸上競技	47 野球	
3 テニスの壁打ち	15 アイススケート	27 キャンプ	36 水泳競技	48 ソフトボール	
4 ボール遊び	16 スケートボード	28 ハイキング	37 柔道	49 バレーボール	
5 体操	17 泳ぎ	29 サイクリング	38 剣道	50 バスケットボール	
6 散歩	18 ボート	30 ゴルフ	39 空手(合気道)	51 ハンドボール	
7 なわとび	19 ヨット	31 グライダー	40 ボクシング	52 サッカー	
8 ジョギング	20 カヌー	32 ハンググライダー	41 なぎなた	53 ラグビー	
9 フリスビー	21 水上スキー	33 スカイダイビング	42 弓道	54 フェンシング	
10 ボーリング	22 サーフィン		43 アーチェリー	55 レスリング	
11 日本舞踊	23 ウィンドサーフィン		44 卓球	56 その他()	
12 ダンス	24 つり		45 バドミントン		

表13 地区別運動実施者の割合

実施者	神奈川	千葉・静岡	赤羽	
実 施 者	155人(82%)	140人(71%)	118人(57%)	
内 容	軽 運 動	0.41	0.46	0.48
	野外スポーツ	0.22	0.23	0.23
	競技スポーツ	0.37	0.30	0.28
非実施者	35人	58人	89人	

表14 実施度の高い運動種目

比較的軽い運動	男	キャッチボール	体操	散歩
	女	散歩	なわとび	体操
野 外 ス ポ ー ツ	男	つり	ゴルフ	泳ぎ
	女	ハイキング	泳ぎ	スキー
競 技 ス ポ ー ツ	男	ソフトボール	野球	バレーボール
	女	バレーボール	卓球	テニス

場合は、神奈川と比べると、公営や民間の運動施設の利用率が高く、約4割の人が利用した。これは、利用可能な施設数に大きな差があるためと推測される。赤羽地区の場合は、どの運動場所も平

均して利用されている。野外や公園を使用する場合も、他の二地区に比べて一段と多かった。これは、人口密度の高い都市部では、利用可能な運動場所はすべて利用されるということを示している。また、特に野外によく出かける人の割合が2割と他の地区の2倍になっていることは、緑を求めての都会脱出、郊外や自然を求めるといふ都会の地域性を示しているといえよう。

表15 最もよく利用した運動場所

施設	神奈川	千葉・静岡	赤羽
近くの学校の運動施設	43.6%	29.8%	12.5%
公 営 の 運 動 施 設	11.7	20.1	15.4
民 間 の 運 動 施 設	6.0	16.0	14.7
野外(海・山・川・湖)	13.1	10.4	19.1
自宅や近所の空地	22.5	15.3	25.0
公 園	0.9	0.7	7.3
そ の 他	1.8	7.6	5.9

(3) 運動の頻度

頻度については、ほとんど毎日、週に3~4回、週に1~2回、月に1~2回、半年に1~2回、年に1~2回、全くやらなかったの7項目から、1つだけを選ばせた。表16にみられるように三地

表16 運動の頻度

頻度	地区	神奈川	千葉・静岡	赤羽
ほとんど毎日		4.9%(5.7)	8.8%(12.0)	7.3%(12.0)
週に3,4回		4.9(5.7)	11.9(16.0)	8.7(14.8)
週に1,2回		20.0(23.4)	15.5(21.0)	10.5(17.8)
月に1,2回		27.3(32.0)	17.6(24.0)	14.7(25.0)
半年に1,2回		13.1(15.0)	7.8(10.7)	10.1(17.2)
年に1,2回		15.1(17.6)	10.9(15.0)	7.3(12.4)
全くやらなかった		14.7	27.5	41.3

()内は年1,2回以上を100とした場合の割合

区間の最も顕著な違いは、全く運動しなかった人の割合である。神奈川では1割5分、千葉・静岡では約3割、赤羽では約4割と、都市部の方が運動をしない人の割合が大きい。しかし、過去1年間に何らかの運動を1回以上実施した人の総数(各地区)を100とした場合、週1~2回以上運動を実施した人の割合は、神奈川で34、千葉・静岡で49、赤羽で44と地区間に差が見られた。また、三地区に共通して言えることは、各地区とも月1~2回の頻度で運動する人の割合が一番高く、これ以上の頻度になると減少している。つまり、週単位で定期的に運動生活をしている人の割合が少ないうことが示されている。

(4) 運動する理由と運動しない理由

運動する理由については、表17の20項目の中から3項目選ばせ、運動しない理由は、過去1年間に全く運動しなかった人に表18の24項目の中から5つまで選ばせた。

表17 運動・スポーツをする理由の選択肢

1. つき合いのため	11. 個性を発揮するため
2. 気晴しのため	12. 協力し合えるから
3. 健康増進のため	13. ストレス解消のため
4. 楽しいから	14. 美容のため
5. 精神をきたえるため	15. 解放感を得るため
6. 心が通じあえるから	16. 自己を新たにするため
7. 自然とのふれ合いのため	17. 自然なふれ合いのため
8. 気分転換のため	18. 規律があるから
9. 体力をつけるため	19. 充実感があるから
10. 気持ちがいいから	20. 緊張感があるから

表18 運動・スポーツをしない理由の選択肢

1. 価値がない	13. きらいだから
2. 危険である	14. ぜいだから
3. むずかしい	15. 見るだけで十分である
4. 体が弱いから	16. めんどうである
5. 用具がないから	17. やり方が分らない
6. 施設がない	18. きっかけがない
7. はずかしい	19. 行事がない
8. やる気が起きない	20. 必要を感じない
9. 教えてくれる人がいない	21. 時間がない
10. へただから	22. 健康に悪い
11. 金がかかる	23. 体に悪い
12. 楽しみは他にもある	24. 疲れるから

運動する理由については、地区間に大きな差はなく、よく選ばれた理由を、いくつか順に並べると、健康増進、体力をつける、楽しい、気分転換、つき合い、ストレス解消、気晴し、心が通じあえる、気持ちがいい、充実感があるという項目になる。

次に、運動しない理由についても、地区間に大きな差はみられなかった。よく選ばれたいくつかの理由を順に並べると、時間がない、きっかけがない、やる気が起きない、疲れるなどであり、運動に対する消極的・否定的態度が窺える。

(5) 学生時代の運動クラブ経験と運動頻度

学生時代の運動クラブ経験(地域のスポーツ教室への参加を含む)と現在の運動の実施頻度のクロス分析の結果、各地域ともこれらに間に大きな関係があることを示した。表19に示されるように学生時代に運動クラブ経験のある人々の現在の運動の頻度は高く、経験のない人々の運動頻度あるいは参加度は低い。これは、学生時代の高頻度の運動習

表19 学生時代の運動クラブ経験と運動頻度

経験	地区	頻度		
		週に1,2回以上	月に1,2回	半年に1,2回以上
学生時代に運動クラブの経験がある	神奈川(112名)	36%	31%	33%
	千葉・静岡(100名)	56	18	26
	赤羽(101名)	43	17	40
学生時代に運動クラブの経験がない	神奈川(115名)	25	21	54
	千葉・静岡(84名)	16	16	67
	赤羽(110名)	13	12	75

慣のキャリアオーバー現象の現われという当然の予想を裏づけている。

(6) 運動頻度と体力についての自信

運動の実施頻度と自分の体力に関する自信の有無のクロス分析の結果、これらの間にある程度の関係があることが示された。特に千葉・静岡と赤羽地区では明確な傾向が示された。すなわち、運動実施頻度の高い人々は、自分の体力に自信があり、実施頻度の低い人々は自信が無いと答える傾向がある。これもほぼ予想通りの結果を示している(表20)。

表20 運動頻度と体力についての自信

自信度	地区	頻度		
		週1, 2回以上	月に1, 2回	半年に1, 2回以下
自分の体力に自信がある	神奈川	25人	23人	32人
	千葉・静岡	38	10	17
	赤羽	27	17	29
どちらとも言えない	神奈川	36	37	57
	千葉・静岡	28	23	47
	赤羽	25	11	68
自信がない	神奈川	8	6	18
	千葉・静岡	3	1	22
	赤羽	4	4	30

(7) 運動頻度と自己の運動生活への満足度

過去1年間に、少なくとも1度以上の運動・スポーツ活動を実施した人々だけに限定し、実施頻度と自己の過去1年間の運動生活に対する満足度のクロス分析を行なった結果、すべての地区において、週1～2回以上の運動頻度を持つ人々の満足度が高く、半年に1～2回以下の人々の不満度が高いことが示された。又、月1～2回の運動頻度は、満足とも不満とも答えにくい運動頻度であると言えるであろう。これは、体力を維持するためのトレーニング頻度が、最低週1回程度であるという運動生理学的知見が、人間の普段の生活体験の中で体感されているといえよう(表21)。

(8) 運動の種類と体力についての自信

運動の種類と自己の体力についての自信の程度

表21 運動頻度と満足度

満足度	地区	頻度		
		週1, 2回以上	月に1, 2回	半年に1, 2回以下
非常に満足	神奈川	40人	26人	10人
	千葉・静岡	42	11	3
	赤羽	32	6	11
どちらとも言えない	神奈川	25	23	33
	千葉・静岡	19	12	19
	赤羽	12	13	15
非常に不満	神奈川	8	17	22
	千葉・静岡	9	10	14
	赤羽	14	12	12

のクロス分析を行なった結果、どの地区でも、これらの項目間に大きな関連が見い出される。表22に見られるように、野外スポーツや競技スポーツに参加している人々は、自分の体力に自信があり、比較的軽い運動の実施者の自分の体力に関する評価はまちまちであったが、特に自信なしの傾向が強い。

表22 運動の種類と体力への自信

種類	自信	自信ある	どちらとも言えない	自信ない
軽運動		187人	327人	107人
野外スポーツ		150	135	23
競技スポーツ		191	229	32

(9) 運動の種類と充実感

趣味やスポーツに熱中している時に充実感を感じられる人(神奈川 80名、千葉・静岡 55名、赤羽 46名)の運動・スポーツの種目選択傾向を見ると、充実感を最も感じる人々は、競技スポーツの実施者であり、その次が野外スポーツの実施者で

表23 運動の種類と充実感

種類	地区	神奈川	千葉・静岡	赤羽	全地区
軽運動		1.45	0.55	0.71	0.84
野外スポーツ		2.63	1.85	1.41	1.92
競技スポーツ		2.63	3.12	1.25	2.33

(趣味やスポーツで充実感を感じる人で当該スポーツをしていない人を1とした場合の当該スポーツの比)

表24 運動・スポーツ生活満足度の要因分析

アイテム	カテゴリー	サンプル数	Weight	Range	偏相関係数
運動頻度	1. ほとんど毎日	22	-0.3791	2.5773	0.3517
	2. 週3～4回	85	-0.9291		
	4. 月1～2回	75	0.1671		
	5. 半年に1～2回	67	1.0178		
	7. 全くしなかった	4	1.6482		
運動相手	1. サークルで	129	-0.0600	0.4775	0.0746
	3. 近所の人と	33	0.4000		
	4. 家族で	47	-0.0435		
	5. 友友と	44	-0.0775		
運動場所	1. 学校	91	-0.2271	0.7647	0.1056
	2. 公・民間の施設	79	-0.0517		
	4. 野外	43	0.2321		
	5. 空地	36	0.3507		
	6. 公園	4	0.5375		
費用	1. 全く使わない	40	-0.2257	2.5590	0.2385
	2. 1万円未満	79	0.2546		
	3. 5万円 "	71	0.3659		
	4. 10万円 "	23	1.1126		
	5. 15万円 "	16	-0.2666		
	6. 20万円 "	8	-1.4463		
	7. 20万円以上	16	0.3207		

n = 516 (有効数 253) 相関比 0.192

あった。軽運動の実施者は、非実施者よりも、それを実施している時に充実感を味わうことは少ないという結果であった。これは、一般に、健康・体力の維持・増進の手段と見られる軽運動と、運動それ自体が目的と見なされるスポーツとの違いであると思われる。また都市地区である赤羽地区の充実群には野外スポーツ志向の傾向がみられ、ここでも都会の環境に居住する人々の自然志向が窺える(表23)。

(10) 運動・スポーツ生活満足度の要因分析

表24は三地区を合わせて、運動・スポーツ生活に満足感を抱いている人々のその満足感に寄与する要因を分析した結果を示している。被説明変量は満足群(非常に満足+満足)、不満足群(不満+非常に不満)とし「どちらともいえない」という回答は除外した。説明変量としてここでは「運動頻度」「運動相手」「運動場所」「費用」の4要因を

取り上げている。運動・スポーツ生活満足群に及ぼす各要因のウェイト平均は-0.3814であり、表中ではマイナスの方向のウェイトを示す要因が満足度に寄与しているということになる。

各要因毎の寄与傾向をみると、運動頻度が高いほど満足度への関与が高いことを示している。運動の相手は満足度には関与しないようである。運動場所では、オープン・スペースでの運動よりも、学校や施設を用いたある意味で正規の運動競技スペースを利用する者ほど満足度への寄与が高いことが推察される。運動生活での経費には一定の傾向は見られないが、強いて挙げるとすれば、スポーツ経費に年間20万円程度かける人では満足度は高く、10万円未満だと不満である傾向が窺える。軽スポーツ群を実施して運動生活に満足している傾向が三地区とも見られた結果と合わせれば費用の寄与は個人差の大きい要因といえよう。

要因間の関連ではレンジが示すように運動の頻

度と費用とが満足度に及ぼす影響が強いことが窺える。このことは偏相関係数からも裏づけられている。中でも運動頻度の寄与が高いことが特徴的であり、満足度に対する定期的な運動実践の関連性が推察される。そのためにも運動頻度を高めることに対する阻害要因を探り、その解消に向けての方策を検討することの必要性が示唆されている。

Ⅲ. まとめ

1. 生活意識の構造

都市地区、非都市地区（準農村地区と中間形態地区）の居住環境を考慮して生活意識の構造を分析した。そこでは充実感を感じる人、充実感を感じない人という二群に大別し、充実感に影響する要因を探ろうとした。その要因として、充実度（充実感を感じる時、生活重視事項）、社会的価値意識（生きがいを求める7つの欲求）、生活感（身体状況、生活程度感、生活環境）を想定し、地域性やデモグラフィックな要因をも必要に応じて加えて検討した。地域性を超えて類縁関係や要因分析も行い、最終的に生きがい充実に寄与する諸要因を特定しようとした。主な結果は次の通りである。

- ① 57%強の人が充実感を感じている。
- ② 地域性に関係なく、仕事と家庭に生きがいを感じる時が多いという身近かな生活への志向が窺えた。
- ③ 中間形態地区（神奈川）に興味やスポーツに充実感を感じない人が多いという地域性がみられ、都市型地区（赤羽）では主婦の特性が「充実する時」に現われた。
- ④ 充実させたい生活側面では「子どもの教育」「健康・体力」「幸福な家庭」という地域性の関与しない人間の普遍的な側面への重視が見られた。
- ⑤ この生活重視側面の類縁関係を二次元布置することによって、「生活の豊かさ」「平和な家庭」「自己の能力開発」というパターンが示された。
- ⑥ 生きがいを求める7つの欲求が充実度に寄与する要因は、「平和な家庭」「未来への期待」

であった。

- ⑦ 身体状況への自信が高く満足度も大きい程、充実感があることが窺えた。
- ⑧ 充実感のある人は生活程度感が高い傾向がみられた。
- ⑨ 生活環境での良好な状態は充実感のある人に多いことが示された。
- ⑩ 生活充実感の要因分析によって、体力自信、スポーツ生活への満足、年収、職場、近所づき合いという要因が生きがい充実への寄与度が高いことが示された。

このような生活意識の構造特性は、健康・体力に関する意識、スポーツ活動に関する意識と相補的に人間の Good-Life 実現に向けて方向づけの機能を果たすと思われる。今回の要因分析では、地区別に分析することができなかった。有効回答数を多くして、住宅居住地域性や生活環境の要因を明確にすることが今後の課題であるといえよう。

2. 健康行動について

都市における健康問題分析の基礎段階として、健康行動をとりあげ、その有無に寄与する要因をパターンとして捉え、都市的特徴を探るために、都市及び非都市地域住民に大別して分析した。分析の手法として、林の数量化理論第Ⅱ類を適用し、非都市地域との比較から、都市における要因のパターンを分析した。その結果をまとめると次のようになる。

- ① 健康行動をしているか否かの判別への寄与の大きい要因は、都市地域では、「年収」、「健康不安」、「年齢」、「職業」、「性別」等であった。また、非都市地域においては、「年齢」、「健康状態」、「職業」、「健康関心」、「通勤方法」等であり、その構成に地域による差異がみられた。
- ② 「年齢」、「性」は地域性とは無関係に、健康行動に密接に係わる基本的・共通的要因と解釈された。
- ③ 「学歴」、「結婚状況」、「生活充実感」、「運動部所属経験」等は、両地域に共通して判別への関与が小さく、その影響は無視できるものであった。

- ④ 都市地域における「健康不安」・「収入」及び非都市地域における「健康状態」・「健康関心」の各要因は、両地域の差異を顕著に現わしていた。

以上のことから、健康行動に影響を及ぼす要因には、都市地域の特性を強く帯びる要因と地域性の影響をあまり受けない要因があることが明らかになった。さらに前者の要因グループは都市地域のパターンの特徴を示していること等も明らかになった。尚、今回の分析の焦点が要因パターンの解明にあるため、「基準(健康行動の有無)の判別」を厳密に説明しつくすことのできる要因の選定については言及することができなかった。また、健康行動を左右する都市的環境の特徴を分析することも不十分であった。これらの詳細な分析は今後の課題といえる。

3. 運動・スポーツ生活について

ここでは、運動・スポーツ生活の実態の地域差に焦点をしばって分析を試みた。その結果、

- ① 都市地区の運動実施率が低い。
- ② 非都市地区の主な運動場所は、学校、空地、公営施設に集中し、都市地区では、あらゆる運動場所が利用される傾向がある。
- ③ 運動頻度は、学生時代の運動クラブ経験、体力に対する自信、運動生活への満足感などと正の相関を持っている。
- ④ 運動の非実施者は、運動に対する消極的・否定的な態度を形成している。
- ⑤ 野外スポーツや競技スポーツの実施は、比較的軽い運動の実施よりも、体力への自信感や精神的充実感を味わい得る運動群であることが明らかとなった。

今回の分析では、地域性から生ずるとみられる居住環境の要因を特定することが不十分であった。スポーツや運動行動に関与する生活環境要因を厳

密に指定することが今後の課題といえよう。

参考・引用文献

- 1) 本多正久・島田一明
1977 『経営のための多変量解析法』 産業能率短期大学出版部。
- 2) 神谷美恵子
1976 『生きがいについて』 みすず書房, 第21刷, pp. 39~69.
- 3) 桑野豊他
1984 「現代社会とスポーツ」『スポーツ社会学講座2』 不昧堂出版, 初版。
- 4) 舛本直文他
1979 「筑波大学生の生活意識の構造」『大学体育研究』第1号, 筑波大学体育センター, pp. 7~25.
- 5) 飯塚鉄雄他
1977 「都民の身体運動に関する生態学的研究一歩行について一」『総合都市研究』創刊号, pp. 33~44.
- 6) 永田晟他
1979 「多摩・墨田地区における集合住宅居住者の健康・体力についての意識」『総合都市研究』第7号, pp. 35~46.
- 7) 中村誠他
1975 「都市生活の特質が身心に及ぼす影響に関する研究」『都市研究報告』62, pp. 69~110
- 8) 徳永幹雄他
1985 『現代スポーツの社会心理』 遊戯社, 初版, pp. 76~77.
- 9) 徳永幹雄他
1985 『スポーツ行動の予測と診断』 不昧堂出版, 第1刷。
- 10) 植村 肇
1978 『保健教育』 有信堂, 改訂第1刷, pp. 20~22.

Key Words (キーワード)

Consciousness of life (生活意識), Health behavior (健康行動), Motor and sport behavior (運動・スポーツ行動), Satisfaction of sport (スポーツの満足度), Substantiality of life (生活充実感) Urban dwelling - non urban dwelling (都市地区居住と非都市地区居住)